愛知淑徳大学論集－文学部篇－　第 49 号　2024.3　73-100

“Appendix” から *The Sound and the Fury* を読み解く
―Was Jason IV the first sane Compson ?―

Reading William Faulkner's *The Sound and the Fury* through the Lens of “Appendix”
-Was Jason IV the first sane Compson ?-

太　田　直　子
OHTA Naoko

キーワード：Jason Compson　Appendix　個人主義,

I

“*The Sound and the Fury* was the first of Faulkner's novels made the question of form and technique an unavoidable critical issue.”[1] と Olga W. Vickery が述べているように，*The Sound and the Fury* (1929) は , William Faulkner の作品の中でも最も難解な作品であり , 多くの視点から批評や考察が展開される作品である。*Flags in the Dust* (1928) を執筆後の 1928 年春から，“7 April 1928” と日付けを記し “Twilight”[2] とタイトルをつけた短編を書き始めた Faulkner は，執筆状況を 1957 年のインタビューで次のように語っている。

> “. . . It was, I thought, a short story, something that could be done in about two pages, a thousand words, I found out it couldn't. I finished it the first time, and it wasn't right, so I wrote it again, and that was Quentin, that wasn't right. I wrote it again, that was Jason, that wasn't right, then I tried to let Faulkner do it, that still was wrong.” (*Faulkner in the University*, 32)

Compson 家 3 兄弟 (Benjy, Quentin, Jason) を語り手として登場させたものの，“. . .I was still trying to tell one story which moved me very much and each time I failed, but I had put so much anguish into it that I couldn't throw it away, . . .” (*Lion in the Garden*, 147) と，Faulkner は語り尽くすことができないという苦悩を抱えて，“outsider”(作者) の視点をもって最後のセクションを書かざるを得なかった。

> By that time I was completely confusing. I knew that it was not anywhere near

> finished and then I had to write another section from the outside with an outsider, which was the writer, to tell what had happened on that particular day. And that's how that book grew. (*Lion in the Garden*, 147)

モダニズムの手法を駆使して "one story" として紡ぎ上げたこの作品を，Faulkner は "It was the best failure." (*Faulkner in the University*, 61) と言いながらも，最も思い入れが強い作品であると何度もインタビューに答えている。

> The one that failed the most tragically and the most spendidly. That was *The Sound and the Fury*—the one that I worked at the longest, the hardest, that was to me the most passionate and moving idea, and made the most splendid failure. That's the one that's my—I consider the best, not—well, best is the wrong word—that's the one that I love the most. (*Faulkner in the University*, 77)

Faulkner が *The Sound and the Fury* に対して並々ならぬ強い情愛を感じていたことがわかるが，この作品によって彼は Yoknapatawpha Saga 構築への一歩を踏み出した。そして，一南部地方作家から 20 世紀を代表する作家へと躍進していくきっかけを掴んだのである。

The Sound and the Fury は，1929 年 10 月 7 日に Jonathan Cape and Harrison Smith から 1,789 部発刊されたが，Evelyn Scott は，"*The Sound and the Fury* is . . . the story of the fall of a house, the collapse of a provincial aristocracy in a final debacle of insanity, recklessness, psychological perversion."[3] と，初版の際に付与されたパンフレットに書いている。Scott の説明は適切に作品を紹介していると思われるが，没落一族の悲劇性が強調されることには若干の違和感を感じる。Compson 兄弟の語りのスタイルとともに，Caddy の自由奔放な生き様，そして歪な家族像など，様々な論争と考察が繰り返されてきた中で，一族の悲劇に隠れた底知れない深い闇があるように感じるのである。

いち早く Faulkner の才能を認めていた Malcolm Cowley (1898-1989) は，1940 年代にはほぼ絶版となっていた Faulkner の小説についてのエッセーを執筆し，Faulkner 再評価への働きかけを行なった。*The Portable Hemingway*（1944）を完成させた Cowley は，Faulkner 作品への関心が高まったところで，*The Portable Faulkner* の編纂に着手することになった。経済的に困窮して仕事を求めてハリウッドに出かけていた Faulkner にとって，Cowley の申し出はこの上もないチャンスであった。1945 年 8 月 9 日，Faulkner のアンソロジー出版を Viking Press が請け負うことになったことを手紙で知らせた Cowley は，アンソロジー出版に向けて Faulkner と書簡を取り交わす。[4]

Cowley は 600 頁 200,000 語から構成されるアンソロジー掲載作品の精選について，Faulkner に意見を求めている。"Instead of trying to collect the 'best of Faulkner' in 600 pages, I

thought of selecting the short and long stories, and passages from novels that are really separate stories, that form part of your Mississippi series—”(Cowley, 22) と告げて，自らが選択した作品名を挙げているが，その際に，“The big objection to this scheme is that it has nothing from ‘The Sound and the Fury,’ which is a unit in itself, and too big a unit for a 600-page book that tries to present your work as a whole:” (Cowley, 23) と *The Sound and the Fury* に言及している。これに対して Faulkner は “What about taking the whole 3rd section of SOUND AND FURY?” (Cowley, 25) と，いわゆる Jason Section の掲載を主張し，第 2 候補として “the last section” Dilsey Section を提案している。Cowley は “. . .you’re probably right about the Jason section being the best one to use separately—” (Cowley, 28) と Faulkner の意志を尊重しながらも “The trouble with the Jason section for separate use is that without Miss Quentin’s running away with the money, . . .” (Cowley, 28) と指摘して，最終章の掲載を示唆した。Faulkner が Cowley の意見を受け入れて，Dilsey Section が短編 “Dilsey” としてアンソロジーに掲載されることになったが，Faulkner は次のような手紙を Cowley に送った。

> Suppose you use the last section, the Dilsey one, of SOUND & FURY, and suppose . . .I wrote a page or two of synopsis to preface it, a condensation of the first 3 sections, which simply told why and when (and who she was) and how a 17 year old girl robbed a bureau drawer of hoarded money and climbed down a drain pipe and ran off with a carnival pitchman. (Cowley, 31-32)

この手紙の 2 週間後，“a page or two of synopsis” とは言えない分量の原稿 “1699-1945 Appendix：The Compsons” が Cowley の元に送られてきた。そして，“Dilsey” の “preface” としてではなく，“1699-1945 Appendix：The Compsons” が *The Portable Faulkner* に掲載された。

テクストの修正（Benjy Section のイタリックの使用等）や再版に際して Faulkner が書いた “Preface,” そして他の作品に描かれた Compson 一族の描写など，テクスト以外の情報を取り入れたかたちで *The Sound and the Fury* は繰り返し考察されてきた。その中でも看過できないのが出版から約 16 年経って書かれた “1699-1945　Appendix：The Compsons” であろう。あくまでも “Appendix”・「付録」であるが，そこには Compson 一族の情報，一族の過去と未来が網羅され，特に，Compson 家の中で唯一自らから語ることがなかった Caddy の動向が詳細に説明されている。

“The completion of that ‘Appendix, ’ . . .was an event in his career as a novelist. I became an integral part of *The Sound and the Fury* and was the last change he would make in what was to remain his favorite among his own works.” (Cowley, 37) と述べているように，Cowley は “Appendix” をもって *The Sound and the Fury* が完結したと考えた。また，Faulkner 自身も，

> Here it is. I should have done this when I wrote the book. Then the whole thing would have fallen into pattern like a jigsaw puzzle when the magician's wand touched it. (Cowley, 36)

と，“Appendix” がジグゾーパズルの最後のピースとなり作品が完成したと考え，さらにその出来栄えに “I think it is really pretty good, to stand as it is, as a piece without implications.” (Cowley, 37) と満足していることがわかる。

The Sound and the Fury を読み解くには “Appendix” に書かれた情報が必要である。そして，16 年後に作者があえて書き加えたものをオリジナルの作品と同列に考えていいのかは疑問でもあるが，小論では，*The Sound and the Fury* の付録として “Appendix” を読むのではなく，一族の過去・未来が記されている “1699-1945 Appendix：The Compsons” / “Appendix Comspon: 1699-1945”[5] を通して *The Sound and the Fury* を再読することにより，Compson 最後の 1 人である Jason Compson 像を考察する。

II

Amerigo Vespucci (1454-1512) が概知のどの大陸にも属さない土地の存在をヨーロッパ人に知らしめたことにより，1 万年以上もその土地に暮らしてきた人々とその末裔は，その生活を脅かされることになった。入植が始まってから，その土地や住人を支配する権利も必要性もないヨーロッパ人によって，先住民はそのコミュニティや文化を奪われていったことからも，アメリカ建国の歴史が，先住民の悲劇の歴史でもあることは周知の事実である。他人の土地に土足で踏み込んできたヨーロッパ人は，エスノセンタリズム (ethnocentrism) のもと，democracy を掲げた国を建国したのである。初期の入植者に共通するのは，ヨーロッパ（旧大陸）で大成できなかった夢を実現すること，そしてこれを神に与えられたセカンドチャンスと考えたことである。ヨーロッパ社会との絆を断ち切ることは，すなわちエゴイズムの表象とも言える。自己の利益と夢を追い，新天地に移り住み，インディアンの土地を奪うという自己本位的な考えを正当化しつつ，アメリカは，専制主義を否定した民主的な共和国を築こうとした。そこには，ヨーロッパで考えられるエゴイズムではなく，個人主義が存在するというのである。

1830 年代に渡米した Alexis de Tocqueville (1805-59) は，貴族社会と民主制の 2 つの社会類型の対比に興味を持ち，平等を求めるアメリカで democracy の不可避性を実感した。[6] self-made-man の原型とされる Benjamin Franklin に代表される個人主義は，個人の尊厳が Frontier Spirit と相まってアメリカ経済の発展に寄与し，勤勉で成功する市民としての美徳を備える存在を指し，自己の利益を追い求めていることを自然なことと捉え，利己心を最大限に利用することで達成されるものとして社会の中で認められていった。

アメリカ社会とそこに根付いたこの精神が，同様に “Appendix” で説明されていく。

“Appendix” は Compson 一族のルーツを辿るだけではなく，まず Mississippi の地に住んでいた Ikkemotubbe の説明から始まる。“A dispossessed American king.” (“Appendix,” 329) , 領地を奪われたと呼ばれた Ikkemotubbe は，王者の風格を持つ男である。彼は，スコットランドから来た逃亡者の孫 , “the grandson of a Scottish refugee” (“Appendix,” 329) に 1 平方マイルの土地を譲り，それが，Mississippi，Jefferson の起源となった。Ikkemotubbe とその末裔は，その後，国の安寧と誇りと名誉を何よりも重んじる Jackson (Andrew Jackson, 1767-1845) に西部の未開の土地，オクラホマへと追いやられる。“Appendix” にはオクラホマ強制移住を正当化するかのような理由付けがなされている 。さらにオクラホマには埋蔵された石油があったのだと追いやられた土地の利益性について触れているが，彼らの末裔の運命が暗澹なるものであることは明白である。Faulkner は白人が現在所有する土地について，“. . . all the land records go back to the Indian patents, and our country’s not very old, our land records are only a hundred fifty years old. That was frontier then.” (*Faulkner in the University*, 9) と，その土地の搾取・略奪が frontier ゆえのものだと説明を加えて，町の創設，白人社会の始まりの闇を意識していることを示している。注目すべきは，Faulkner が一族の没落の歴史を辿るために，先住民，Native American の記述から記したことである。

Ikkemotubbe と Jackson の説明に続いて，Culloden Moor から Carolina へと逃亡してきた初代 Compson，Quentin MacLachan から始まる一族についてその姿が語られる。Quentin MacLachan は，“Claymore”（クレイモア刀）と “tartan” を携えて Scotland から出奔した。さらに，イングランド王に刃向かって敗北した轍を踏まないために，80 歳の時に孫を連れて再び Carolina から Kentucky へと逃亡した。つまり，自らの起源を証明するもの (Claymore と tartan) を持って安住の地を求めて奔走し続けたのである。彼の息子 Charles Stuart は，英国連隊から階級を剥奪され除隊となり行方知れずとなっていたが， 4 年後に義足をつけて父 (Quentin MacLachan) と息子がいる Kentucky 州 Harrodsburg に姿を現した。“the gambit” であると記されている Charles Stuart は，その後陰謀に加わり，一族の安全と家名の誉に泥を塗り，共謀者から追われる身となり，息子とともにまた逃亡する。これらの逃亡は自己本位的なものであり，何よりも自分の利益を優先させるための出奔であるが，彼らが住むアメリカは democracy 社会として更地に打ち立てられた新しい社会であり，平等を何よりも重んじ，新しい個人主義の概念が生まれるところであった。こうした社会の中で出奔した Quentin MacLachan のその後についての詳細は “Appendix” では語られないが, 息子 Jason Lycurgus が, 1820 年に上等な拳銃 2 丁と鞍袋を携え，新天地 Jefferson に辿り着く。定住することができず逃亡を繰り返した Charles Stuart の息子 Jason Lycurgus が，Jefferson に Compson 一族の楚を築き，その過程が詳細に “Appendix” に記されるのである。

Tocqueville はアメリカにおける個人主義が社会から個人を引き離し，社会を遮断してしまうことの危険性を説いており，アメリカ人の孤立状態が未来にとって不吉なものであると見ているが, 彼は個人的な経済力の追求に没頭することによって孤立状態になることを防ぐために,

公共的役割が最善の得策であるとも述べている。[7] Jason Lycurgus が拳銃２丁と鞍袋を携え新天地 Jefferson に辿り着いたその姿は，Claymore と tartan をもって出奔した父 Quentin MacLachan の姿とは明らかに異なっていた。物質的安楽を求めるために必要なもの，そして同時に社会と対峙しながら繋がるための道具でもある武器を携え，更地にたどり着いた Jason Lycurgus は，労働と知恵によって物質的成功を勝ち得ていく。そして同時に土地に定着するために社会とのつながりを深めていく。

> . .with a pair of fine pistols and one meagre saddlebag on a small lightwaisted but stronghocked mare . . . . he, Compson, was always careful to limit to a quarter or at most three furlongs: and in the next year it was Ikkemotubbe who owned the little mare and Compson owned the solid square mile of land.　　(“Appendix,” 332)

利己主義的な言動ではなく，「交換」(雌馬と土地) という巧みな技を駆使し功利主義を勝ち得るのであるが，その行為は，各人が平等な権利主体と規定することにより，自己本位的な利己主義を「個人主義」という名のもとに覆い隠しているようである。インディアンの土地を搾取すること（交換すること）が frontier であるとした意図が，Jason Lycurgus をはじめとする白人の個人主義的観点からのものであることが示される。アメリカ社会の発展に従って，アメリカにおける個人主義が，その認識の幅を広げていく姿は，こうして “Appendix” の Compson 一族の歴史の中でも読み取ることができる。アメリカの発展の歴史と重複する Compson 一族の南部での定着と繁栄が明らかになる一方で，*The Sound and the Fury* で描かれる一族の繁栄から没落への落差とそのスピード，アメリカ社会から見放された南部社会，そして近代化した南部に取り残された旧南部の遺構のような一族の姿が，より鮮明に表現されていく。そして同時に，その没落が必然的なものであることが “Appendix” によって立証されていくのである。

1860 年，Chickasaw 族管理地 Okatoba に辿りついた Jason Lycurgus は，６ヶ月のうちに Chickasaw 族管理官の経営する商店の店員になり，12 ヶ月経つと出資者となり，そして実質上の共同経営者となる。Chicksaw 族の若者相手に所有する雌馬でレースを挑み，その雌馬と引き換えに１平方マイルの土地を所有するに至る。

> . . .Compson owned the solid square mile of land which someday would be almost in the center of the town of Jefferson, forested then and still forested twenty years later though rather a park than a forest by that time, with its slave quarters and stables and kitchengardens and the formal lawns and promenades and pavilions laid out by the same architect who built the columned porticoed house furnished by steamboat from France and New Orleans, and still the square intact mile in 1840. . . .
>
> (“Appendix,” 332)

“Compson Domain” と呼ばれる土地家屋とともに，Compson 一族は貴人を輩出する名家となった。Compson 家の繁栄はプランテーションとともに発展した南部社会の興隆と同じ流れを持っている。開拓時代は自分の土地を持つことが理想であり，そして誰にもそのチャンスが与えられていると考えられた。当時の南部社会には egalitarianism（平等主義）が掲げられていたと W. J. Cash も述べている。しかし，プランテーションが南部の経済や社会を中核になるにしたがって “class lines” が出来上がり，“big houses” (*The Mind of the South*, 35-38) を保持するための様々な法律や慣習が生まれた。“The patriarchal nature of the southern family has been attributed to slavery.”[8] と言われるように，奴隷制と共に確立したプランテーション・白人家父長制に基づく社会が確立したのである。その中で平等主義を掲げて発展した社会における個人主義は，“. . . individualism of the plantation world would be one which would be far too much concerned with bald, immediate, unsupported assertion of the ego. ”(*The Mind of the South*, 42) と，南部においては形骸化されていき，白人社会の中で歪な意識になっていったのである。父親が一家の長であり、かなりの法的権威が父親の権力を強化した父権社会が確固たるものになる一方で，南北戦争の敗退により南部は衰退していく。しかし，依然として家族や先祖に対する義務が優先される社会であり，個人主義的な衝動が影響した面もあるが、家族や先祖に対する義務が最優先された。[9]

初代 Compson（祖父）の名を引き継いだ Quentin McLachan は知事となり，彼は “the last Compson who would not fail at everything”（“Appendix,” 333）と，成功へと突き進んだ最後の Compson になった。そして，南部と同様に時代に取り残された Compson 一族は衰退していった。贅を凝らした邸宅はペンキが剥げ落ち，雑草が蔓延し，町の中で醜態をさらす屋敷となった。しかし，“The tendency to name after male family elders remains strong in the south” [10] と一族系譜を重んじる南部社会において，先祖の名前を引き継いだ Jason III が Compson 家の跡取りとなる。屋敷に手を加える財力も気力もなかったが，彼は “as the unchallenged patriarch, the strong, respected provider, the mainstay of southern society.” [11] として南部社会の中で家長として生きなくてはならなかった。

家長として力を発揮できない Jason III については，“Appendix” では “JASON LYCURGUS” の項に追加のように書き加えられるのみであり，彼の家長・夫・父としての姿は，*The Sound and the Fury* で息子たちの目を通して語られる。そして，“Appendix” には *The Sound and the Fury* で記された Comspon 家の概略と作品には描かれなかったその後の Compson 家の姿が説明されている。

III

４人きょうだい Quentin III, Candace (Caddy), Jason IV，Benjy (Benjamin) の中で，Quentin III と Benjy は，*The Sound and the Fury* で語り手として自ら語る機会を与えられている。画期的な手法を用いて描かれた３歳の知能しかもたない Benjy の本能的感覚による内的独白は，一族の道徳的・精神的退廃を伝えているが，十分にそれを伝えきれたとは言い切れない。Benjy の語りとは異なるものの，現実世界から乖離した屈折した知性ゆえに，自らの死を確認するために独り歩き回り独白をし続ける Quentin III の語りも，内的独白であった。しかし，彼の世界には未来は存在せず，社会に適応できず矮小化したその姿が，“Appendix” では Benjy のその姿同様に分析され述べられているにすぎない。ただ，Benjy は生き延び，1933 年に Jason IV によってジャクソンの州立精神病院に送られたことが説明されている。

“It began with the picture of the little girl's muddy drawers, climbing that tree to look in the parlor window with her brothers . . .” (*Faulkner in the University*, 1) と，*Faulkner* が *The Sound and the Fury* の始まりがその姿であったという Caddy は，きょうだいの中で唯一自ら語ることを許されていない。[12] *The Sound and the Fury* おいて，常に兄弟の言動や運命を握っているのは彼女であり，その言動によって一族の運命が決まるのであるが，読者が知りたい詳細な情報は描かれていない。母として娘 Quentin のために弟 Jason と対峙する Caddy の姿は，Benjy や Quentin　III が思慕する Caddy とは異なっており，変化・成長した姿を説明する作品で示される彼女ついての情報が読者を納得させるには十分とはいえない。一方で “Appendix” には，Caddy が苦渋の決断で結婚し，出産後も家族と離れて独り社会と対峙する波瀾万丈な人生が簡潔に説明されており，激動の時代の中で独り逞しく生き延びていく力強い姿が表現されている。

しかし，その中で何よりも注視すべきは，1925 年から 1940 年の Caddy の情報を，１人の女性 Melissa Meek が詳らかにしていくということである。

> . . .there was a woman in Jefferson, the county librarian, a mousesized and -colored woman who had never married, who had passed through the city schools in the same class with Candace Compson and then spent in the rest of her life trying to keep *Forever Amber* in its orderly overlapping avatars and *Jurgen* and *Tom Jones* out of the hands of the highschool juniors and seniors who could reach them down without even having to tiptoe from the back shelves where she herself would have to stand on a box to hide them.　　(“Appendix,” 337)

Melissa Meek は Caddy の同級生の独身女性であり，町の中でも隠れた･忘れられた存在であった。Melissa は Caddy とは対照的な女性であるが，２人は共に町の中で認められる存在ではな

かった。目立った存在の Caddy が町から出ていく一方で，Melissa は常に目立たず町でひっそりと暮らしていた。偶然にも Caddy の情報を得た Mellissa が，その真意を求めて執拗に探索していく姿は，異様であるがそれがかえって Caddy の再登場を印象的に演出している。そのため，“Appendix” の “Caddy” の項目は，Caddy 自身よりも Melissa Meek の物語になっていると思われる。

Melissa を通して実年齢よりもはるかに若く美しい Caddy の姿が紹介される。Jason は Melissa に見せられた写真の若い女をみて “ ‘It’s Cad, all right,’” (“Appendix,” 339) と姉と認識をするものの，彼はそれが現在の Caddy だと信じることができない。 “‘That Candace?’ he said. ‘Don’t make me laugh. This bitch aint thirty yet. The other one’s fifty now.’” (“Appendix,” 340) つまり，現在に生きる Jason にとって，写真の色褪せることのない美しい Caddy の姿は過去のものであり，現在には存在しないのである。その一方で時間を経ても美しさと若さを失わない Caddy の姿は，彼女の存在を手を触れてはいけない特別な女性として Faulkner が昇華した存在のようにも感じるから不思議である。だが，メリッサは執拗に “ ‘We must save her ! . . .’” (“Appendix,” 340) と Caddy の存在を探求しを続け，Compson 家に支えていた黒人の Frony, そして Dilsey をも訪ねて Caddy の写真を示し，存在することを認めさせて彼女を救おうと試みる。ここでも Caddy は自ら語る機会は与えられていないが，Dilsey の反応を見て Caddy の本音を了得し，領解するに至った Melissa によって，一族から無視されてきた Caddy の声が代弁されるのである。

> *Yes*, she thought, crying quietly, *that was it she didn’t want to see it know whether it was Caddy or not because she knows Caddy doesn’t want to be saved hasn’t anything anymore worth being saved for nothing worth being lost that she can lose*
>
> (“Appendix,” 342)

Quentin と Benjy が未来を持たず，そして Caddy が自らの未来を抹消するのと同様に，Caddy の娘 Quentin の未来も “Appendix” ではあっさりと消される。

> And so vanished; whatever occupation overtook her would have arrived in no chromium Mercedes; whatever snapshot would have contained no general of staff.
>
> (“Appendix,” 347-48))

“Appendix” に描かれた Compson のきょうだいと姪は，利己主義的な行動と，行き過ぎた愛情を自己本位に考えたために，南部社会そして Compson 一族から抹消され，そして，Quentin III と Benjy は，時代とともに変化する個人主義的な思考を習得することができないまま抹殺された。Compson の家族史が示された “Appendix” は，Comspon の血筋が Jason を残して存

在しないことを明確にするのと同時に，*The Sound and the Fury* の「現在」・1928 年を共有する一族の生き残りの未来を否定した。そして終焉を迎える Compson 家と社会とのつながりは，生き残りである Jason に託された。*The Sound and the Fury* に描かれた Jason は，個性的な語りを持つ兄弟と Caddy 母娘に翻弄されてその存在感は薄いが，それを払拭し，その言動を裏書するかのように，“Appendix” に記された “JASON” には明らかに Faulkner の意図があることを示している。

IV

> JASON IV. The first sane Compson since before Culloden and (a childless bachelor) hence the last. Logical, rational, contained and even a philosopher in the old stoic tradition: thinking nothing whatever of God one way or the other, and simply considering the police and so fearing and respecting only the Negro woman, his sworn enemy since his birth and his mortal one since that day in 1911 when she too divined by simple clairvoyance that he was somehow using his infant niece's illegitimacy to blackmail its mother, who cooked the food he ate. (下線部筆者)
>
> (“Appendix,” 342-3)

何よりも “The first sane Compson” は，*The Sound and the Fury* に描かれた Jason 像からは乖離するものに思われる。酒に溺れたニヒリズムの父 Jason III, 妹 Caddy への思慕が近親相姦という妄想になって自殺した兄 Quentin, そして 3 歳の知能しかない “idiot” の Benjy という異常な家族を見れば，Jason は生き延びた「まともな」人物になるのだろうが，Faulkner 自身が “who to me represented complete evil” (*Lion in the Garden*, 146) と評する Jason の説明としては，違和感を感じ得ない。執筆から約 16 年経て，作者 Faulkner の Jason 像や作品に対する方向性が変化したのではないかと思われる。Faulkner は自身の作品を手元の残していないと Cowley にも述べているように，自らが創作した人物の記憶が曖昧なのか，他の作品において同名の登場人物を描いた際に誤謬が起こっていることは数多く指摘されている。

1945 年に “Appendix” を読んだ Cowley は，テクストと “Appendix” の内容の矛盾点に気がつき Faulkner に問い合わせているが，Faulkner の返答はいずれも曖昧である。年月を経ると作者の意図が変化することは, Snopes 三部作をみても明らかである。1 作目 *The Hamlet* (1940) に描かれた Eula Varner と 2 作目 *The Town* (1957) で描かれた Flem Snopes と結婚した彼女とは別人であり，少女から女性への成長とは片付けられない変容は違和感よりも作者の意図と思えるのである。40 代の Faulkner によって執筆された “Appendix” には，当然のことながらテクストとの誤謬が存在することはもちろんであるが, Faulkner が Jason を “sane” と言い切ったことは，修正という言葉を遥かにこえる彼の意図が表われていると思えるのである。

> “You’re worse, “Caddy said, “you are a tattletale, If something was to jump out, you’d be scairder than a nigger.”
> “I wouldn’t,” Jason said. . . . .
> “Scairy cat,” Caddy said. (“That Evening Sun,” 309)

これは，“That Evening Sun” の最後の Caddy と Jason の会話である。５歳の Jason と７歳の Caddy の幼い姉弟の日常的な言い争いではあるが，短編に描写された Jason の性格や言動は，*The Sound and the Fury* に描かれた Jason と同じであり，成長後の彼の性格や姿を彷彿とするものであることはよく指摘される。臆病ではないと主張し，“I aint a nigger”（“That Evening Sun,” 297）とアイディンティティを繰り返し確認したり，チョコレートケーキを作ってくれたら泣き止むと交換条件を出すなど打算的な行動をとる５歳児である。*The Sound and the Fury* においても，きょうだい間の関係は “That Evening Sun” と同様である。

> Caddy said, “You’re crazy.”
> “You’re skizzard.” Jason said. He began to cry.
> “You’re a knobnot.” Caddy said. Jason cried. His hands were in his pockets.
> “Jason going to be rich man.” Versh said. “He holding his money all the time.”
> (*SF,* 35-36)

常にポケットに両手をいれている姿は，金銭に執着し “hold” にこだわる Jason 像を象徴するものであり，作品の中でも繰り返し描写される。Caddy から Quentin への送金を搾取し，母に偽り金を貯める Jason は，守銭奴であり良心のかけらもないない極悪非道な男である。*The Sound and the Fury* で Jason は自ら語ることを許されているが，実世界の中で生きているものの，現実を偏見とコンプレックスというプリズムを通して分析し眺めているかのようで，倒錯的であり，狂気的でもある。そう考えると，Quentin の語りとは異なるものの，必ずしも実世界に存在することがないむしろ狂気的な内的独白とも言えるのである。しかし “Appendix” には，*The Sound and the Fury* で曖昧にされた Jason の屈辱感の根拠が端的に説明されており，それにより彼の姿は修正される。

> . . .since that day in 1911. . . . Who not only fended off and held his own with Compsons but competed and held his own with the Snopeses. . . . (“Appendix,” 343)

1911 年以来，Jason は町に台頭してきた新興勢力（Snopes）と対峙し自分の身を守ることに終始した。保身は “. . . to him all the rest of the town and the world and the human race too except himself were Compsons, inexplicable yet quite predictable in that they were in no

sense whatever to be trusted." ("Appendix," 343) と彼がこの世に存在する者すべてに不信感と懐疑心を抱いていたためであった。"Appendix" の記述によって *The Sound and the Fury* の Jason の言動が，家族に対する不信感に寄与すると Faulkner は伝えているが，それは彼の家族内の立ち位置にその一旦があることがわかる。

南部では現在でも子供に代々受け継がれた名前をつける。彼も "Jason" を引き継いでいるものの，Comspon 家を継承するのは長男 Compson III であった。"Appendix" の Compson 一族の家族史には世嗣の記録しか残されず，その妻も兄弟姉妹も存在しない。世嗣以外の男性は一族から離れ，アメリカ建国へと導いた移住者同様に未知の土地で自らの人生を築ける可能性を持っていた。[13] 1911 年までの Jason，つまりポケットに両手を入れていた Jason にも，小金を貯めて人生を切り開く可能性が残されていたはずである。しかし，彼は兄 Quentin III の死によってその権利を奪われてしまう。つまり代役が負の遺産しかない一族を引き受ける運命を背負わせられたのである。

Jason I が築いた財を引き継いだ General Compson, Jason II は，1866 年に土地を抵当にいれた。Jason III は，世嗣 Quentin III の Harvard 大学への進学とそして長女 Caddy の結婚のためにゴルフクラブへ土地を売却した。残ったのは屋敷と裏庭の花壇，納屋，Dilsey 一家が住む一画だけであった。". . .all the money from the sale of the pasture having gone for his sister's wedding and his brother's course at Harvard, ..." ("Appendix," 343)　Jason III は自力で財力を保持することができず，彼は，相続した土地を金に換えて，長男そして長女にそれを託した。" . . . Harvard *your mother's dream for sold Benjy's pasture for*" (*SF*, 102)　Harvard 進学が母の夢であったと Quentin は朦朧とする記憶の中で父の言葉を思い出すが，財力をなくした一族にとって，社会の中で存続する残された道は一族の名誉を保つことであった。

Quentin III は父そして祖父 Jason II から受け継いだ懐中時計をもって南部を出て名門 Harvard へと進む。

> It was Grandfather's and when Father gave it to me he said I give you the mausoleum of all hope and desire ; it's rather excruciating-ly apt that you will use it to gain the reductor absurdum of all human experience which can fit your individual needs no better than it fitted his or his father's. I give it to you not that you may remember time, but that you might forget it now and then for a moment and not spend all your breath trying to conquer it. Because no battle is ever won he said. They are not even fought. The field only reveals to man his own folly and despair, and victory is an illusion of philosophers and fools.　　(*SF*, 76)

戦うことの愚かさや時間を忘れることの必要性を説いて手渡された懐中時計が時を刻む音に苦闘しながら街を放浪する Quentin III は，父の意図を理解することができずに死を迎える。

Jason II からの伝わる懐中時計は，初代 Compson が繋いだ Claymore と tartan と同様に長男 Quentin に手渡されるが，それもここで途切れてしまい Jason IV に譲渡されなかった。“Appendix” では初代から引き継がれた持ち物 Claymore と tartan が強調されて明記されていたが，この懐中時計の記述はない。「もうない」(“there is nothing else” *SF*, 178) というのは言葉の中で一番悲しい言葉なのだよと Jason III が Quentin に語るが，すべてを長男と長女のために使い果たしたことで，Jason IV には世嗣として受け取るものが「もうない」，存在しないのである。引き継がれるはずの懐中時計で時間を忘れることもできない Jason は，ただただ現実と対峙することになる。

Jason に現実と絶望を与えているのは死んでいった一族ではなく，生き延びた母である。一族の名について誰よりもこだわりを持つ母 Caroline は，父権社会の中で生き，そしてその価値観を変えることなかった。Caroline について Faulkner は “Appendix” の中で，“after the widowed mother died” (“Appendix,” 335) とだけ記し，彼女の名前さえも記していない。あくまでも “Appendix” は血族の歴史であり，そこには血脈を持たない母（妻）は存在しないのであるが，現実社会に生きる Jason にとって，彼女の根源にある形骸化した歪な考え，“The traditional image of the chivalrous southerner, was centered in the southern father’s devotion to family, tradition, and race. [14] が常に彼の人生を阻み続けた。これが血族を繋ぐ次世代への継承を Jason IV に拒否させた元凶なのではないだろうか。

夫 Jason III との不和はもちろんのこと，Caroline は母としても，一家を支える女主人としての役割も果たすことができない。“‘I know I’m just a trouble and a burden to you.’” (*SF*, 181) と口癖のように息子 Jason に言うが，彼女は自己愛と被害妄想そして虚栄心が剥き出す女性である。息子 Quentin が死の間際に “‘*If I could say Mother. Mother*’” (*SF*, 95) と渇望するほどにこの一家は母不在なのである。彼女の姿は，南部社会が産出した虚像への憧憬に対するコンプレックスと喪失感を表現するものである。

夫 Jason III は妻に対して高圧的に接することはないが，そのシニカルな受け答えによって妻は自侮蔑的な扱いを受けたと捉えて，夫に対して敵意を露わにする。“‘My people are every bit as well born as yours.’” (*SF*, 44) とコンプレックス感じて虚栄を張り，彼女は自らの血筋の正当性を主張しその継承を望む。3 人の男児を出産したことは，世嗣の妻としての役割を十分に果たしたといえる。後継の長男，スペアーともいうべき次男はともに一族の名を受け継ぎ命名された。直系尊属継続を確証する働きを果たして，さらに彼女は 3 男を出産したが，その子に Maury と実家の名を継承させる。しかし，Bascomb 家の名を引き継いだ男児が白痴であることが明らかになると，Benjamin (Benjy) と改名し，この子供の存在が自分への神からの “punishment” (“. . . Benjamin was punishment enough for any sins I have committed. . .” *SF*, 103) だと哀れな母を演出する。

> Jason I must go away you keep the others I'll take Jason and go where nobody knows us so he'll have a chance to grow up and forget all this the others dont love me they have never loved anything with that streak of Compson selfishness and false pride Jason was the only one my heart went out to without dread (*SF*, 102)

誰にも認められない自分の存在意義が Compson 家の中にはないと考える Caroline は，Compson から名前を受け継いだ Jason に，Bascomb 家の後継者としての役割を押し付けようとする。

The Sound and the Fury には「Dummady の葬式」という重要なシーンがある。Dummady は Compson 家に同居する母方の祖母である。[15] Jason がいつもこの祖母と一緒に寝ていたことは "The Evening Sun" の中でも記されているが，祖母は Jason にとって母親代わりであり，彼の良き理解者であった。しかし祖母の死去とともに Jason は居場所を失い，Quentin, Caddy そして Benjy のきょうだいの中で Jason が相容れない存在であるように描かれていることに読者も気が付く。母が Compson 家に同調しない存在であるように，子供達の中で Jason がその立場であった。

Jason は Bascomb 家に未来がないことを理解している。愚かな行動で Compson 家に面倒を蹴ける不甲斐ない男の典型・伯父 Maury と，兄を常に庇い肯定する母を，Jason は批判的に見ている。伯父が起こす面倒と混乱は，Jason にとって体内に流れる Bascomb の血を肯定するどころか拒絶したい要因である。しかし母は，" . . . no one to love him shield him from this I look at him every day dreading to see this Compson blood beginning to show in him at last. . . ." (*SF* 103) と Jason を守ると主張する。つまりは Bascomb 家の血脈を残すために彼女は生き続けるのである。兄 Quentin の自殺により，Jason は自動的に母が嫌う Compson 家の血脈を継ぐ世嗣となった，しかし "Because you are a Bascomb, despite your name. "(*SF*, 182) と主張する母が存在する限り，彼は母に認められる Bascomb の血を持つ唯一の男なのである。

". . .used his own niggard savings out of his meagre wages as a storeclerk to send himself to a Memphis school. . . "("Appendix," 343) と金を貯め，自力で Memphis の学校に通う涙ぐましい努力を Jason がしていたことが端的に "Appendix" で説明されているが，絶望的な状況にありながら日々努力する彼の姿は，アメリカ小説に描かれた "Ragged-Dick" と同じであるはずだが，彼の打算的なイメージが強すぎてそれを修正するには至らない。おまけに，商才をもって自立して生きるはずであった Jason は，否応なしに「なにもない」凋落した二家族の後継者として祭り上げられていったのである。この不条理な立場を Jason は受け入れざるを得なかった。ただ一つ，彼の成功への夢を叶えてくれそうな条件が示されたが，それも一瞬のうちに打ち砕かれた。

V

誰の子供かわからない子を身籠ったCaddyは，“I’ve got to marry somebody.” (*SF*, 113) と，すぐさま結婚する必要があると自らの行為を説明している。そして“. . . as soon as you feel better you and Caddy might go up to French Lick” (*SF*, 102) という父の言葉がQuentinの記憶に断片的に残されているが，娘の結婚相手を至急探さなければいけないという両親の意図が表現されている。一方で，Caddyの結婚への決意が両親の意に沿うためであったのか，または説得された結果なのかの詳細は *The Sound and the Fury* には記されていない。

> . . .(and perhaps in the calculation and deliberation of her marriage did) . . . .
> Was two months pregnant with another man’s child. . . . when she marriage (1910) an extremely eligible young Indianian she and her mother had met while vacationing at French Lick the summer before. (“Appendix,” 336-7)

“Appendix” には母と共にFrench Lickに出かけて，“an extremely eligible young Indianian” の相手を見つけ，即座に結婚式が行われたことが記されている。“eligible” と思うのは母だけだったのかもしれない。しかし，未婚の母という社会的汚名を回避するために，両親は彼女をHerbertと結婚させ，父は不動産を売った金を結婚資金に充てた。Caddyは“*but now I know I’m dead I tell you*” (*SF*, 124) と結婚式の前に最愛の兄Quentinに話し，父と弟Benjyのことを託す。

> *Father will be dead in a year they say if he doesn’t stop drinking and he wont stop he cant stop since I since last summer and then they’ll send Benjy to Jackson I cant cry I cant even cry one minute . . .* (*SF*, 124)

Catherine Baumはこの時のCaddyの心情について，“Since then, she has evidently learned that she can trust no one.”[16] と解説しているが，結婚相手がSydney Herbert Headであることは，Caddyにとって何も意味をもたない。一方Quentinは，Caddyの妊娠という真実を知らされて混乱し，さらに彼女の結婚相手を認めることができない。“Not that blackguard Caddy” (*SF*, 111) “*A liar and a scoundrel Caddy was dropped from his club for cheating at cards got sent to Coventry caught cheating at midterm exams and expelled* ” (*SF*, 123) と，Herbertとの結婚を思い止ませようと，彼の悪行をあげ，さらに直接Herbertに対峙するが，Quentinは何も変えることができない。Herbertとの結婚はCompson家の名を汚さないためのものであり，QuentinのHarvard進学と同様に一家の希望となるはずであったからだ。

この結婚で未来を描いたのは母であった。そして“*Herbert will be a big brother has already*

promised Jason" (*SF*, 93) と，Herbert が Jason の就職を保証して彼の将来を照らす一筋の希望でもあった。

> . . .but I know you wont Herbert has spoiled us all to death Quentin did I write you that he is going to take Jason into his bank when Jason finishes high school Jason will make a splendid banker he is the only one of my children with any practical sense you can thank me . . . .　　(*SF*, 94)

しかし，"Divorced by him 1911" ("Appendix," 337)，離婚によって希望はすべて打ち砕かれた。Caddy の離婚のせいで才能ある Jason に正当な機会が与えられなかったと母は嘆くが，Jason は後になって "I was a kid then. I believed folks when they said they'd do things. I've learned better since." (*SF*, 206) と自ら語り，"'Well, he was probably lying too,' . . .'He may not have even had a bank. And if he had, I don't reckon he'd have to come all the way to Mississippi to get a man for it.'"(*SF*, 221) と，母が信じる Herbert の存在自体を冷静に分析するに至っている。彼は，報われなかった事実を受け止めて，"I can stand on my own feet like I always have." (*SF* 206) と誰の手助けもなく自立することを決心し，そして着々とそれを実現していると自負するようになる。しかし，それが自立というよりも社会からの孤立と社会への信頼喪失であることが彼の悲劇なのである。

姉の離婚，兄の死，そして父の死によって Jason に託された血族は，母，白痴の弟，姪 Quentin そして伯父だけになった。父の死は誰よりも Jason にとって重要な意味をもっているように思われる。Jason はそれまで以上に金に執着し，さらに「交換」，常に自分がより多くの利益を得られる不平等な「交換」を徹底的に行う冷血な態度をとるようになっていく。

> Well, I got to thinking about that and watching them throwing dirt into it, slapping it on anyway like they were making mortar or something or building a fence, and I began to feel sort of funny and so I decided to walk around a while.
>
> (*SF*, 202)

父の墓に土が投げ込まれる様子をみた Jason は，埋葬作業が終わるまで墓地を歩き回り，そして再び誰もいないはずの Compson 家の墓に戻ってくる。そこには，喪服を着た Caddy がいた。"'that job' . . . 'I 'm sorry about that Jason'" (*SF*, 202) と離婚のせいで仕事を失った弟に詫びる Caddy とともに，Jason は一族の墓を眺める。

> I didn't say anything. We stood there, looking at the grave, and then I got to thinking about when we were little and one thing and another and I got to feeling

funny again, . . .　　(*SF*, 203)

姉と Compson 家の墓を見ながら郷愁にも似た奇妙な衝動を感じるが，その奇妙な衝動は何か狂気に満ちた気持ちへと繋がり，彼を現実へと引き戻した。“. . . kind of mad or something, thinking about now we'd have Uncle Maury around the house all the time, running things like the way he left me to come home in the rain by myself. “(*SF*, 203) 父の死によって彼が感じたことは, 凋落した Compson を継承させられる不条理さや責任ではなかった。それは, “‘Now, now. Don't you worry at all. You have me to depend on, always.’”（*SF*, 201）と言葉のみで誠実さと実力がない狡猾な伯父 Maury Bascomb , そして，“I was a different breed of cat from Father.”（*SF*, 201）と父とは系統が違う自分に対して自己優位に事を運ぼうと企んでいると Jason が考える姉 Caddy，この２人と対峙する気持ちであった。

伯父 Maury は，Jason が最も嫌悪する人物である。伯父が Jason に書き送った借用書の手紙は , Bascomb 家の終焉と精神的腐敗を示し，その血筋の継承者と母から言われている Jason にとっては，否定し排除したいのが伯父の存在である。

> “‘My dear young nephew’, it says
>
> ‘You will be glad to learn that I am now in a position to avail myself of an opportunity regarding which, for reasons which I shall make obvious to you, I shall not go into details until I have an opportunity to divulge it to you in a more secure manner. . . .the ultimate solidification of my affairs by which I may restore to its rightful position that family of which I have the honor to be the sole remaining male descendant; that family in which I have ever included your lady mother and her children. . . .
>
> (*SF*, 223)

初期投資の資金を無心し，そして一族で葡萄園を経営することを持ちかける伯父は “a bonaza”（*SF*, 224）「ぼろもうけ」という根拠のない一発逆転を信じている。自ら努力し働くこともなく，人の金を頼りに一攫千金のみを狙うこの伯父の姿は，南部白人社会の崩壊を描いていると言える。Caddy からの送金を手元に残して置くこと，銀行に預けないこと，そして姉からの送金小切手を偽物の小切手にすり替えて，それを母に破らせること，こうした行為はすべて伯父から自分の金を守り抜く手段でもあった。Jason が血族に拘束された人生を送っている姿は，*The Sound and the Fury* の中でこのように丁寧に説明されているが，その戦いは Jason にとって必然的であり，さらに一族の継承の可否は彼にとって悩むべき問題でもなかった。それを示すかのように，出版後 16 年して書かれた “Appendix” には，Bascomb 家の血族に対する説明，伯父 Maury に対する描写が一切なく，Bascomb 家の血脈どころか，Jason が当然のように Compson 家の後継者としてそして，その一族の終焉を決定する強かな姿が描かれている。

V

Jason が父の死をうけて対峙しなくてはいけないもう 1 人は，姉の Caddy である。逆境に耐えながらも努力を続けた Jason は，銀行さえも信じることなく，母を欺き巧みに姉からの送金を細工して常に現金を手元に置いていたが，それが彼を支えている原動力であった。なんとかして自分の利益に結びつけるために，彼には「交換」が必須となる。Jason は Caddy に持ちかけられた「交換」,「金を渡したら娘に合わせる」という取引を手段として，常に自分の立場を優位に進めるという能力を発揮する。自由奔放に生き, 家から出て行った Caddy は, 妊娠によって父の援助で結婚をして生き延びるのであるが，離婚後は家族から精神的にも金銭的にも独立した人生を送ることになる。しかし，Caddy は「母」の役割を放棄することができない。娘 Quentin に会うために手段を問わず金を稼ぐ。母 Caroline から娘との面会や連絡を取ることさえも拒絶された Caddy は，娘との接点を Jason に託すことしかできなかった。Jason は積極的に姉との「交換」を試みる。自分の「金」だけが自分を保証するものだと確証した Jason は，自分に有利な「交換」を取引として自らの可能性を見出そうとしたのである。

Jason の狡猾さを知りながらもそれに頼らざるを得なかった Caddy の娘への情を，非情にも否定する Jason の行為は，“evil” そのものである。常に Compson 家の子供達の側に立っていた Dilsey も “You, Jason!” (*SF*, 282) とその冷酷さ呆れるほどであるが，Caddy の娘 Quentin に出し抜かれてまんまと金を盗まれるその姿を見て，読者は爽快感さえ感じるのである。それはまるで，*The Scarlet Letter* (1850) において，Hester Prynne が Roger Chillingworth を出し抜いて Arthur Dimmesdale と幸せになってほしいと願う読者の気持ちと同様である。Roger Chillingworth が妻の姦通相手を探求するに従って悪魔化していく姿は，Jason が「金」に執着して姪 Quentin を追いかけゆく様と同様であり，それはショーに行くための 25 セントを欲する黒人少年 Luster に金を渡さないばかりか，その目の前でショーのチケットを破り捨てる残忍な非人間的な Jason の姿へと結びついていく。何が善で何が悪なのかが錯綜する中で，*The Scarlet Letter* では Hester の不義の娘 Pearl が，無邪気に小悪魔のように振る舞い大人たちを翻弄していくが，同様に *The Sound and the Fury* においては，Caddy の娘 Quentin が Compson 家に送り込まれた小悪魔になっている。Pearl が Hester の罪の象徴であると同じように Quentin も Caddy の罪であり，Comspon 家の不名誉を象徴するものであるが，“Once a bitch always a bitch,” (*SF*, 180) と考える Jason にとって，可視化できる悪・Quentin を執拗に問い詰めることが彼の現実なのだ。

Quentin の言動は娘時代の母 Caddy の姿と比較されるが，家出の方法が母と同じであったとしても “Appendix” において彼女の行動は “without premeditation or plan, not even knowing or even caring how much she would find when she broke the drawer open;” (“Appendix,” 347) と，母のそれと異なり短絡的であることが説明される。Quentin の自由奔放な言動はすべて Jason が被る被害へと結びつき，彼の怒る姿が浮き彫りになる。自らが画策し

た不法な策略により手に入れた金が，姪に盗まれたことを公にすることができない Jason のジレンマと憤りを自業自得だと考えていた読者も，姪に盗まれたのが 3,000 ドルではなく本当は 7,000 ドルだったという事実が “Appendix” で明かされることで，*The Sound and the Fury* では “evil” 以外の何者でなかった Jason に対する見解が変化する。また，恣意的で突発的な行動をする Quentin を車で必死に追いかける Jason の姿は，*The Sound and the Fury* では滑稽に描写されており喜劇的でもあるが，“Appendix” で盗まれた金額の数字が示されてことで，Jason 怒りが簡単に終息するとは思えない。

The Sound and the Fury では，姪を追いかけながら，自分が何を求めているのかわからなくなっていった Jason が，最後には “‘It don’t matter. . . .’” “It don’t make any difference.’” (*SF*, 312) と諦めに近い境地に至り，彼の追跡は終了する。一方で “Appendix” では，

> . . . he didn’t pursue the girl himself because he might catch her and she would talk, so that his only recourse was a vain dream which kept him tossing and sweating on nights two and three and even four years after the event, . . .
>
> (“Appendix,” 347)

と彼の怒りが根深いものであることが補足される。しかし，同時に興味深いことに，“Appendix” では，怒りが継続する Jason を描写しながらもその後，彼の怒りの対象である Quentin の存在があっさりと消されている。

> QUENTIN. The last. Candace’s daughter. Fatherless nine months before her birth, nameless at birth and already doomed to be unwed from the instant the dividing egg determined its sex. (“Appendix,” 346)

「独身の運命が定まっている」Quentin の消息説明は，

> . . . ran away with the pitchman who was already under sentence for bigamy. And so vanished; whatever occupation overtook her would have arrived in no chromium Mercedes; whatever snapshot would have contained no general of staff.
>
> (“Appendix,” 347-8)

“vanished” とあまりにも単純な言葉で語られている。

The Scarlett Letter においても，母と共に Boston を去った Pearl は，結婚して裕福に幸せに暮らしているという噂話として語られているが，Pearl は２度と Boston に姿を見せず，罪の象徴でもある Pearl ではなく，Hawthorne は再び母，Hester Prynn を Boston の街に戻して物語

を終えている。Pearl のその後よりもさらに明確に，そして簡単に Quentin は “Appendix” でその存在を消された。そして，母 Caddy は，ナチスドイツの将校とのスナップ写真という驚くべき形で再登場する。“Appendix” を通して見ると，Quentin は Caddy と Jason の間の「交換」の道具にすぎず，現在に生きる Jason にとって実存する怒りの対象は，あくまでも Caddy であることを強調しているといえる。

Quentin の追跡を終えて Jason が町に戻ってきた時，墓参のために母と Benjy は馬車に乗って郡庁舎前の広場にいた。T. P. ではなく，その日は Dilsey の孫 Luster が馬車を操っていた。Luster は馬に鞭をあて自分でも立派に馬車を御することができることを披露しようと試みるが，広場の南軍兵士像をいつもと反対周り，左に回ったことで Benjy が喚き出す。馬車に乗り込み，Benjy の恐怖と苦痛の叫びを聞いて動転した Luster の手元から手綱を奪い去り元通りに右回りに馬車回転させたのは，Jason であった。彼は，Luster を叱責したのち手綱を渡し立ち去る。そして，ルーティーンに戻った馬車に乗った Benjy の様子のシーンをもって，*The Sound and the Fury* は終わる。

> The broken flower drooped over Ben's fist and his eyes were empty and blue and serene again as cornice and façade flowed smoothly once more from left to right, post and tree, window and doorway and signboard each in its ordered place.
>
> (*SF*, 321)

Jason の操作で日常を取り戻した Benjy と，何も変わることのない Jefferson の街並みを描写した作品の結末は，Jason が Compson 一族から逃れられず，凋落する Compson 家を最後の１人として見届けるであろうことを予測させながらも，Dilsey に “‘I ‘ve seen de first en de last,’” (*SF*, 297) と語らして，静かに Compson 一族の終焉を告げる。しかし Faulkner は “Appendix” でこの結末を変えたのである。

VI

Judith P. Saunders は著書 *American Classic: Evolutionary Perspectives* の中で，文学作品は文化的・物理的な環境と人間の関係を探求するものであり，生殖を原動力とする活動を表象するものだとして，進化論批評による分析の有効性を説いている。[17] “Appendix” に示された Jason の生活を，この進化論的視点を通して考察すると，彼のもつ本性と複雑性がより明らかになる。

1933 年，母が死ぬと Jason は Benjy を Jackson にある州立精神病院に送り，形骸化した Compson 一族の屋敷を処分する。

> (. . . Jason Compson himself who as soon as his mother died. . . committed his idiot younger brother to the state and vacated the old house, first chopping up the vast oncesplendid rooms into what he called apartments and selling the whole things to a countryman who opened a boardinghouse in it), ...　　(“Appendix,” 343)

Jason I が Ikkemotubbe と交換して手に入れて築き上げた屋敷は，Jason II によって抵当にいれられ，Jason III がその一部を切り売りした。そして最後に，Jason IV が Compson 一族を切り刻むように残った屋敷を間仕切りして売り払った。それは，つまり Compson 家として「交換」・継承するための「もの」がついに消滅したことを示す。これをもって Compson 家は物理的に途絶える。一族の物理的消滅と「交換」して Jason が手にいれたのが，彼だけの機能的な空間・生活であった。

> . . .moving into a pair of offices up a flight of stairs above the supplystore containing his cotton ledgers and samples, which he had converted into a bedroom-kitchen-bath, ...
> (“Appendix,” 344)

そこには彼の情婦 “a big plain friendly brazenhaired pleasantfaced woman no longer young” (“Appendix,” 344) が週末に訪れる。[18]　彼の住居も人間関係もすべて機能的で合理的であり，もはや若くない女性との関係は血族の継承を否定するものであるが，それが Jason にとってのナルシスト的な個人的幸福であった。“simply, his friend from Memphis” と呼ばれる女との煩わしくない関係は，自分の力・「金」で「交換」した対価であり，彼にとって満足すべき結果であった。しかし，それは同時に Compson 家の血脈の断絶を意味している。“Appendix” において，姪 Quentin とそして Caddy による血脈の継承の可能性を完全に否定し，さらに Jason の遺伝子継承を否定したことにより，彼は “He was emancipated now. He was free.” (“Appendix,” 345) となったのである。そうであるならば，なぜ Jason は Jefferson に残ったのか。血脈を否定するのであれば，完全に解放されるのであれば，彼は一族が築きあげた社会からも脱出すべきではないのか。

しかし，Jason は，Jefferson に残った。町で仕事をする際，そして姪 Quentin を追跡する時も，興奮して自分の意見を主張するたびに Jason は “‘I’m Jason Compson’” (*SF*, 306) とフルネームで自分の名前を叫び，自分が Compson 家の者であることを主張する。彼は一族が築き上げたこの土地・社会でも，自分の名前を叫ばなければ認められないと感じていることがわかる。つまり，主張しなければ祖先が築きあげた恩恵を受けることができないことを，身をもって知っていることになる。“Appendix” で語られた一族の歴史は，個人の利益を求めて突き進んだ男たちの物語であり，さらに，そこには彼らの Jefferson・社会との関わりが記されている。Claymore と tartan だけをもって新しい土地へと個人の利益を追求して果敢に進んでいった先

人が，社会に根を下ろして時代に翻弄されながらも生きていくに従って，彼らが築いた個人主義からなる社会から次第に隔離の過程が “Appendix” では描かれている。

> . . .Jason III (bred for a lawyer and indeed kept an office upstairs above the Square, where entombed in dusty filingcases some of the oldest names in the county--. . . who had not returned to juvenility because actually he had never left it—that that lawyer's office might again be the anteroom to the governor's mansion and the old splendor) sat all day long with a decanter of whiskey and a little of dogeared Horaces and Livys and Catalines, composing (it was said) caustic and satiric eulogies on both his death and his living fellowtownsmen, ...　　(“Appendix,” 334)

このように説明される Jason の父 Jason III は，Tocqueville が危惧した “Each man is forever thrown back on himself alone, and . . . that he may be shut up in the solitude of his own heart. ”[19]　人物そのものであった。アル中でニヒリズムに陥った Jason III であったが，彼が唯一行動を起こしたのが，“Appendix” でも再度明記された土地の売却であった。“. . .who sold the last of the property, . . .to a golfclub for the ready money with which his daughter Candance could have her fine wedding in April and his son Quentin could finish one year at Harvard and commit suicide in the following June of 1910; ”(“Appendix,” 334-35) 兄 Quentin と Caddy は父が売った土地の代価と引き換えに Jefferson からそして一族から離れることができた。しかし，Jason にはそのチャンスさえも与えられなかった。“I says I never had university advantages. . . .” “I says you might send me to the state University;” (*SF*, 196) と悔恨の情を込めて愚痴る Jason の言葉には，彼の本音が隠れている。兄のような Harvard でなくても，せめて父が卒業した州立大学に通わせてくれたら，自分の人生は変わっていたと主張する Jason には，一族の崩壊への切り札を切った父 Jason III さえも受けた恩恵を，自分が受けることができなかったことへの悔恨が現れている。それは，“I dont want to make a killing; save that to suck in the smart gamblers with. I just want an even chance to get my money back.” (*SF*, 264)　と Jason Section の最後で自ら語った Jason の言葉に通じる。彼が渇望したのは “even chance” を与えられることであったのだ。

Robert N. Bellah は，20 世紀アメリカにおける近代的個人主義 “modern individualism” を “utilitarian individualism”（功利的個人主義）と “expressive individualism”（表現的個人主義）の２つに分類しており，アメリカはこの２つの個人主義を巧みに融合させた個人主義を確立していくと述べている。[20] 19 世紀半ばに Tocqueville がアメリカで感じた個人主義は，時代をへて変化し，私的な生活と公的な生活との関係が個人性を破壊することなく，どのように融合していくのかが課題であったが，利己主義的な個人主義ではなく，社会・共同体にとって価値のある人間になるために，孤独に耐え，他者を必要とせず，他者の判断を当てにすることなく他

者の願望に属することなく生きていけるよう[21]に進化してきた姿は，まさしく “Appendix” で記された Compson 家の継承者たちの姿である。「共同体」とは歴史を有するもの[22]であると考える Bellah は，“In order not to forget that past, a community is involved in retelling its story, its constitutive narrative, and in so doing, it offers examples of the men and women who have embodies and exemplified the meaning of the community.”[23] と述べ，こうした共同体がなければ，家族の意識を保持するのは不可能であると考える。人生の物語を子どもへ語り継ぐことで未来へ希望を託すことができるわけだが，“Appendix” は読者に，Comspon 一族そして Jefferson の歴史を意識させる役割を担った。

Compson 最期の継承者 Jason IV は，功利主義的個人主義を得ることが共同体に自分を認めさせる，つまりは自分の存在を確固たるものにするものだと考えていたが，それは与えられなかった「平等」の欠落を自ら埋める行為であった。懐疑主義的で一見表現的個人主義の中に暮らしたと思われた父 Jason III も，最期には目の前にある一家の名誉を守る行動を取るものの，その後は家族も希望も忘れた空虚な時間を過し，アルコールに依存して自己の世界に閉じこもることしかできなかった。Jason IV が父にもとめた「平等」は最後まで与えられることはなく，彼に残されたものが一族の歴史だけであっとことを，Faulkner は “Appendix” を編むことで示した。

> He could see the opposed forces of his destiny and his will drawing swiftly together now, toward a junction that would be irrevocable; (*SF*, 307)

と，自分の意志と運命の間で苦悩する Jason は，何も与えられなかった「空虚な自己」を自覚した。そして，家族の歴史（“The constituted self”）[24] を否定することも，自暴自棄になり個人主義を履き違えて暴走することなく，一族が紡いだ土地に残り，意志と運命の中間地点に自分の生きる場所を見出したのである。

The Scarlet Letter の結びで Hawthorne は，Dimmesdale の惨めな経験から学ぶべき教訓を次のように記している。

> “‘Be true! Be true! Be true! Show freely to the world, if not your worst, yet some trait whereby the worst may be inferred!’” (*The Scarlet Letter*, 238)

アメリカ個人主義の構築と共に Compson 一族は南部においてその地位を確立した。しかし，社会や地域の発展に追随することができず衰退してしまったが，血脈によって築き上げられた歪な家族の終焉を導いたのは，自分に対して正直であることを試みた Jason であった。“That Evening Sun” の最後の場面で，Nancy の小屋から父と子供たちが家路に着く姿が “Jason was on father’s back, so Jason was the tallest of all of us.” (“That Evening Sun,” 308-09) と描写さ

れているが，父から Compson 家を引き継いだ Jason は，きょうだいの中で高い位置・視野を持つ人物に成長した。*The Sound and the Fury* で描き尽くされなかった Jason の苦悩や葛藤の正当性を，Faulkner は “Appendix” を編むことで修正し，彼を “the first sane” でありながら “hence the last ” (“Appendix,” 342) Compson としたのである。

註：

1) Olga W. Vickery, *The Novels of William Faulkner* (Baton Rouge, La.: Louisiana State Univ. Press), 1959, p. 28.

2) *The Sound and the Fury* が出版される過程・経緯について，Faulkner は 1955 年長野で開催されたセミナーで詳細に説明している。*cf.* Robert A. Jelliffe (ed.), *Faulkner at Nagano* (Tokyo: Kenkyusha LID, 1962).

3) Evelyn Scott,“On William Faulkner’s *The Sound and The Fury*,” *William Faulkner: Critical Assessments*, Vol. II Henry Claridge (ed.) (London: HELM Information, 1999), p. 163.

4) 1945 年 8 月 9 日付で Cowley は Faulkner に長い手紙を書き送る。その際の手紙そして事情については , Malcolm Cowley, *The Faulkner-Cowley File*, (London: Chatto & Windus, 1966), pp. 20-24. に詳細に記載されている。その後，２人は書簡で *The Portable Faulkner* の編集方針等を検討している。

5) *The Portable Faulkner* 出版の際に Faulkner は “Appendix” を新しく書き加えた。“1699-1945 Appendix: The Compsons” と表記されているが，The Modern Library から出版された *The Sound and the Fury* では “Appendix Compson: 1699-1945” として作品の最後に追加された。小論は，“Appendix” を通して *The Sound and the Fury* を考察することから，*The Sound and the Fury* と “Appendix” の引用はすべて The Modern Library 版に基づく。

6) *cf.* Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, J. P. Mayer (ed.), George Lawrence (trans.) (New York: Harper Perennial, 1988).

7) Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, pp. 506-08. Part II “The Influence of Democracy on the Sentiments of the Americans,” の Chapter 2 “Of Individualism in Democracies.”

8) Charles Regan Wilson (ed.), *Myth, Manners, and Memory, The New Encyclopedia of Southern Culture* Vol. 4 (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2012), p. 64.

9) アメリカ南部の父権社会は “In the South the father was the family head, and considerable legal authority fortified his power.” と説明されている。さらに “Although individualistic impulses were in some ways influential, duty to family and one’s forebears was paramount.” 家族における先祖への義務が優先される社会でもあった。*cf.* Charles Regan Wilson (ed.), *Myth, Manners, and Memory, The New Encyclopedia of Southern Culture* Vol. 4, p. 64.

10) Charles Regan Wilson (ed.), *Myth, Manners, and Memory, The New Encyclopedia of Southern Culture* Vol. 4, p. 67.

11) *Ibid*., p. 64.

12) Caddy を語り手にしなかったことについて，Faulkner は次のように答えている。“. . .because Caddy was still to me too beautiful and too moving to reduce her to telling what was going on, that it would be more passionate to see her through somebody else’s eye, I thought.” (*Faulkner in the University*, p. 1.)

13) Faulkner 自身も 4 人兄弟であったが，次男 Murry Charles Falkner Jr (nicknamed ‘Jack’) が 1899 年に，三男 John Wesley Thompson Falkner (‘Johncy’) が 1901 年にそして四男 Dean Swift Faulkner が 1907 年に生まれている。Dean を Faulkner は子どものように可愛がっていたが，彼の誕生によって，さらに Faulkner は長男としての立場を自覚するようになったと言われている。“From the beginning, Dean was his father’s favourite, with Murry accepting from him the sort of behaviour he would never have tolerated from William.” (Richard Gray, *The Life of William Faulkner*, Oxford: Blackwell Publishers, 1996, p. 81.) また次男の Murry Charles Falkner Jr は，長男の Faulkner と異なり，自分は次男として故郷に留まることなく自由に仕事をして生きることができたと繰り返し述べている。故郷と家族のもとを離れて自由に過ごすことができる一方，兄 William は南部 (Oxford) から出ることができなかったと説明している。

14) Charles Regan Wilson (ed.), *Myth, Manners, and Memory, The New Encyclopedia of Southern Culture* Vol. 4, p. 64.

15) 1905 年に Falkner 一家が Oxford に移り住んでから，1907 年まで，母方（Butlar）の祖母 Damuddy が同居していた。この祖母について Faulkner の弟が『ミシシッピのフォークナー一家：マリー・C. フォークナーの回想録』の中で説明している。祖母についてマリーは，「彼女は私たち兄弟の誰に対しても限りない親切と愛情を注いだが，彼女の注意の大部分が私に向けられていることは明らかなように私には思われた。」(p. 11) と語っている。
母方の祖母と共に，父方の祖母の存在も Faulkner 兄弟には重要であり，２人の祖母の死は彼らに影響を及ぼしたと言われている。Faulkner 家の家族・親族についての関わりは，*The Sound and the Fury* における Compson 家の創作に影響があったと言われている。*cf.* Thomas L. McHaney, *Literary Masterpieces*, Vol. 6 (Detroit: A Manly, Inc. Book, 2000), pp. 24-5. *cf.* Richard Gray, *The Life of William Faulkner* (Oxford: Blackwell Publishers, 1996).

16) Catherine B. Baum, “‘The Beautiful One’ Caddy Compson as Heroine of *The Sound and the Fury*,” in *Faulkner and His Critics*, John N. Duvall (ed.) (Baltimore: The John Hopkins University Press, 2010), p. 170.

17) Judith P. Saunders, *American Classic: Evolutionary Perspectives*（Academic Studies Press, 2018）, p. x. “. . .literature explores relationships between human organisms

and their environments, cultural and physical; it represents reproductively driven activities, both direct and indirect." と説明されている。

18) "Appendix" では名前が記されていないが，その女は Lorraine と思われる。

19) Alexis de Tocqueville, *Democracy in America*, J. P. Mayer (ed.), George Lawrence (trans.), (New York: Harper Perennial, 1988), p. 508.

20) Robert N. Bellha. *et al.* *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*, (New York: Harper & Row, Publishers), 1985, pp. 142-144.

21) *Ibid*., p. 146. "To serve society, one must be able to stand alone, not needing others, not depending on their judgement, and not submitting to their wishes."

22) *Ibid*., p. 153. ". . . real community as a 'community of memory' one that does not forget it past."

23) *Ibid*., p. 153.

24) *Ibid*., p .154.

参考文献

Baum, Catherine B. "'The Beautiful One' Caddy Compson as Heroine of *The Sound and the Fury*," in *Faulkner and His Critics*. John N. Duvall ed., Baltimore: The John Hopkins University Press, 2010.

Bellah, Robert N. *et al.* *Habits of the Heart: Individualism and Commitment in American Life*. New York: Harper & Row, Publishers, 1985.

Blotner, Joseph. *Selected Letters of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1978.

Cash, W. J. *The Mind of the South*. New York: Vintage Books, 1991.

Cowley, Malcolm. *The Faulkner-Cowley File*. London: Chatto & Windus, 1966.

Fant, Joseph L. and Robert Ashley. eds. *Faulkner at West Point*. Jackson: University Press of Mississippi, 2002.

Faulkner, William. *The Sound and the Fury*. (The Collected Text with Faulkner's Appendix) . New York: The Modern Library, 1992.

_____. "1699-1945　Appendix：The Compsons" in *The Portable Faulkner*. Malcolm Cowley ed. New York: Penguin Books, 1985.

_____. "That Evening Sun," *Collected Stories of William Faulkner*. New York: Vintage Books, 1977.

Fowler, Doreen and Ann J. Abadie. eds. *Faulkner and Women: Faulkner and Yoknapatawpha 1985*. Jackson: University Press of Mississippi, 1986.

Duvall, John N. ed. *Faulkner and his Critics*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2010.

Gray, Richard. *The Life of William Faulkner*. Oxford: Blackwell Publishers, 1996.

Gwynn, Frederick L. and Joseph L. Blotner. eds. *Faulkner in the University*. University of Virginia Press, 1977.

Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. New York: The Modern Library, 2000.

Kaczmarek, Agnieszka. *Little Sister Death: Finitude in William Faulkner's The Sound and the Fury*. Frankfurt: Peter Lang GmbH, 2013.

Kartiganer, Donald M. and Ann J. Abadie eds. *Faulkner and the Gender: Faulkner and Yoknapatawpha, 1994*. Jackson: University Press of Mississippi, 1996.

Kinney, Arthur F. *Critical Essays of William Faulkner: The Compson Family*. Boston: G.K.Hall & Co., 1982.

Meriwether, James B. and Michael Millgate. eds. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner*. Lincoln and London: University of Nebraska Press, 1980.

Moore, Kathleen. “Jason Compson and the Mother Complex,” *MS Quarterly*, Fall 53 (4), 2000.

Polk, Noel. ed. *New Essays on The Sound and the Fury*. New York: Cambridge University Press, 1993.

Porter, Carolyn. *William Faulkner*. New York: Oxford University Press, 2007.

Rampton, David. *William Faulkner: A Literary Life*. Macmillan, 2008.

Robbins, Ben. “Inscrutable Images and Cultural Migrations: Wartime Noir and the Compson Appendix, ” *The Faulkner Journal*, Spring 28 (1), 2014.

Sabdquist, Eric J. *Faulkner: The House Divided*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1985.

Saunders, Judith P. *American Classic*. Academic Studies Press, 2018.
(https://www.jstor.org/stable/j.ctv4v3226.8)

Snell, Susan. *Phil Stone of Oxford: A Vicarious Life*. London: The University of Georgia Press, 1991.

Scott, Evelyn. “On William Faulkner's *The Sound and The Fury*,” *William Faulkner: Critical Assessments*. Vol. II Henry Claridge, ed. London: HELM Information, 1999.

Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America*. J. P. Mayer, ed., George Lawrence (trans.), New York: Harper Perennial, 1988.

Vickery, Olga W. *The Novels of William Faulkner*. Baton Rouge, La.: Louisiana State Univ. Press, 1959.

Watson, Jay and Ann J. Abadie. eds. *Faulkner's Geographies: Faulkner and Yoknapatawpha, 2011*. Jackson: University Press of Mississippi, 2015.

Wilson, Charles Regan. ed. *Myth, Manners, and Memory. The New Encyclopedia of Southern Culture* Vol. 4, Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 2012.

ウィリアムソン , ジョエル .『評伝　ウィリアム･フォークナー』金澤哲，森有礼，相田洋明（監訳）水声社，2020.

フォークナー，マリー・C.『ミシシッピのフォークナー一家：マリー・C・フォークナーの回想録』岡本文生 (訳) 冨山房 , 1975.